様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００６０４

研究課題名（和文）形容詞連用修飾の創発性をとらえ修飾関係を予測する構文ネットワーク分析

研究課題名（英文）A constructional approach to adverbial modification of adjectives in Japanese: the productive network model with creative instances.

研究代表者
井本　亮（IMOTO, Ryo）

福島大学・経済経営学類・教授

研究者番号：２０３６１２８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は形容詞連用修飾関係の「一成分・多解釈」の事例を構文文法の枠組みを用いて実証的に分析し、次の研究成果を得た。（1）形容詞連用修飾の分析に構文ネットワークを導入し、形容詞連用修飾の【意味的多様性・機能的共通性・創発的事例の発生】の説明が可能になった。（2）修飾関係の解釈プロセスが語彙レベルから語用論レベルまで多層的に展開していることを明らかにした。（3）感情形容詞による情態修飾を主観性と連用修飾の機能論的動機から解明した。（4）位置変化事象における結果修飾の事例を指摘し、その成立条件を示した。
本研究成果によって、形容詞連用修飾の分析に構文ネットワークの視座が有効であることが実証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の研究成果によって、形容詞連用修飾の分析に構文ネットワークの視点が有効であることが実証され、形容詞連用修飾の【意味的多様性・機能的共通性の説明】が可能になった。この分析の視点とコーパスデータの探索的調査を用いることで、先行研究が見落としていた形容詞連用修飾の多様な事例の発掘・記述・分析に成功した。今後さらに「一成分・多解釈」の様相における形容詞連用修飾の事例研究の拡大、各種形容詞の多様な事例研究の蓄積に貢献するものと展望される。

研究成果の概要（英文）：This study empirically analyzed cases of "one-component/multiple-interpretation" of adverbial modification of adjectives using the framework of constructional grammar, and obtained the following research results. (1) By introducing the constructional network into the analysis of adverbial modifications, it became possible to explain the semantic diversity, functional commonality, and emergent case occurrence of adverbial modifications. (2) The interpretive process of modification relations was shown to be multilayered from the lexical to the pragmatic level. (3) Manner modification by adjectives of emotion was explained in terms of subjectivity and the functional motive of serial modification. (4) Cases of result modification in change-of-place events were pointed out and the conditions for its establishment were presented.
The results of this study demonstrate the effectiveness of the constructional perspective in the analysis of adverbial modifications of adjectives.

研究分野：日本語学

キーワード：連用修飾　形容詞　構文ネットワーク　結果構文　一成分・多解釈　「大きくV」　感情形容詞　adverbial modification

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．　研究開始当初の背景

形容詞連用修飾のうち、いわゆる情態修飾関係については情態修飾成分・関係の分類という観点から記述的研究が蓄積されてきたが、分類の源泉となる[形容詞連用成分＋動詞述語文]という構文レベルでの関係構成の原理、機能、多様な修飾関係の成立条件については、考察されたことがほとんどなかった。そこで本研究では、下記に述べる4つの研究課題を掲げて分析を行った。

第一に，形容詞連用修飾は意味解釈の多様性と連用修飾としての機能的共通性という対照的な特性を併せ持つ。

- 意味的多様性：風船が大きくふくらんだ。船が大きく揺れた。髪型を大きく変えた。など
- 機能的共通性：[修飾対象の《範疇的意味概念》が〈形容詞の語彙概念〉だ]

しかし，形容詞連用修飾関係のこうした意味的多様性と機能的共通性という観点はほとんど注目されてこなかった。この研究課題についての分析結果は(1)で詳述する。

第二に、連用修飾成分「軽く」の意味・受け取られる解釈は多様かつ連続的に変わりうる。形容詞連用成分の意味解釈は単独では未確定なのである。

- 帽子を軽く叩く。帽子を軽く作る。納豆と卵を軽く混ぜる。年商は一億円を軽く超える。など

これまで、形容詞連用形の未確定性の様相については十分に議論されてきたとは言いがたい。この研究課題の分析結果は(2)で詳述する。

第三に、感情形容詞が話者や主語の感情を参照してデキゴトの情態を表すと解釈できる連用修飾用法は先行研究ではほとんど指摘されてこなかった。

- 原っぱの真ん中にバス停がさびしく立っていた。風が心地よく吹いている。など

この研究課題についての分析結果は(3)で詳述する。

第四に、形容詞連用修飾がモノの存在のあり方を表す位置変化動詞文には、固有の特徴を持つ形容詞連用修飾関係が認められるが、先行研究の説明ではうまく捉えられない特徴がある。

- アップルパイにリンゴが大きく入っている。看板に企業ロゴが大きく入っている。など

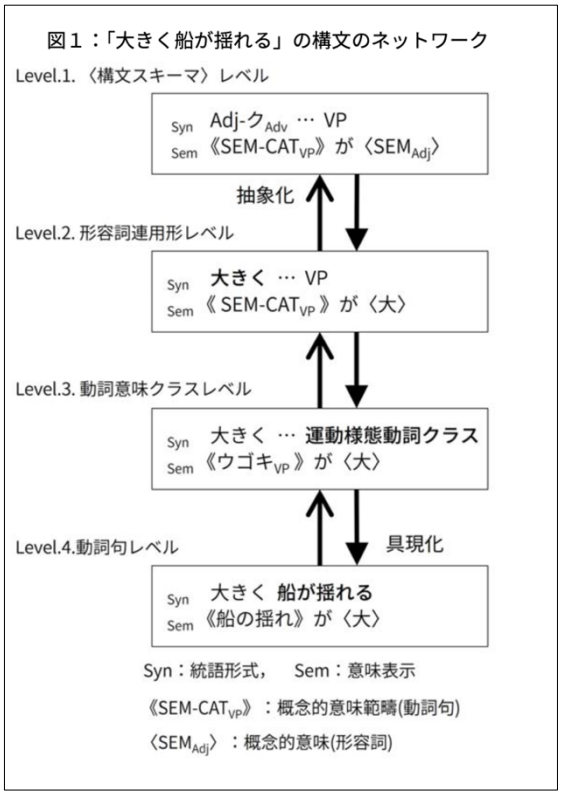
この研究課題の分析結果は(4)で詳述する。

２．　研究の目的

本研究の目的はコーパスデータに現れる形容詞連用修飾関係の多様なタイプの記述的研究に構文文法の構文ネットワークの考え方が有効であることを実証し，その具体的な様相を記述的に明らかにすることである。具体的には、事例の分析の枠組みを提案・導入し((1))、新しい形容詞連用修飾の実相を明らかにすることである((2)(3)(4))。

３．　研究の方法

本研究の分析の手法として〈構文文法における構文ネットワーク〉の視座を導入し，事例データとして〈大規模コーパスデータの探索型調査〉によって，産出される修飾関係のタイプを広く観察・記述していく。そして，各形容詞の修飾関係のタイプの分布の様相，動詞語彙の意味クラスから直接予測できるタイプと事象全体に拡張させて予測できるタイプなどに分類しながら，それぞれの成立条件を明らかにする。



４．　研究成果

(1)　形容詞連用修飾関係の構文ネットワーク分析

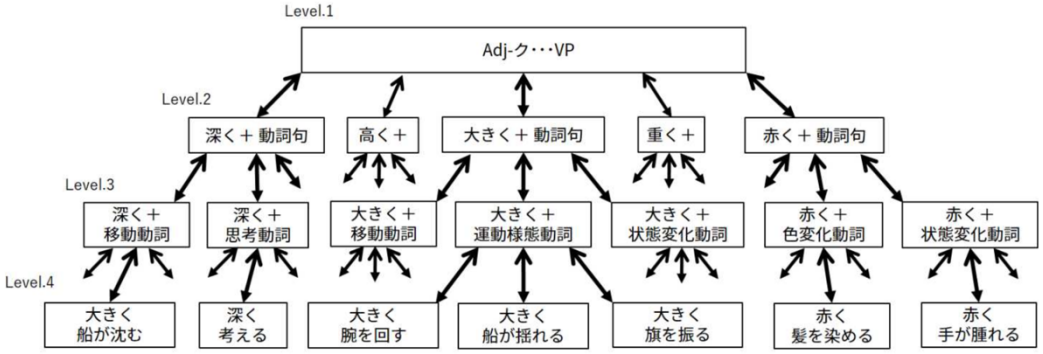
本研究は「大きく船が揺れる」「壁を赤く塗る」のような形容詞連用形の副詞的用法（以下「形容詞連用修飾」と呼ぶ）の事例について，構文スキーマとその具現化の様相から組織される構文ネットワークとして包括的に捉えることを提案した。

本稿では前節の問題提起に対し，構文文法におけるタクソノミーにもとづく構文ネットワークによる分析の枠組みを導入した（図 1）。まず，前述した2つの意味的特徴との関係を規定する。

- 形容詞連用修飾の意味的多様性は構文ネットワークにおいて最も具現化(instantiation)した事例の多様性として実現する。
- 形容詞連用修飾の機能的共通性は構文ネ

ットワークにおいて最も抽象化（abstraction）された構文スキーマとして共有される。

図２：形容詞連用修飾構文のネットワーク（の一部）



- 形容詞連用修飾の構文スキーマ（図 1）
- 本研究の主張は次の2点にまとめられる。第一に、形容詞連用修飾は意味的多様性と機能的共通性という対照的な特性を持つが，これは構文ネットワークにおける具現化と抽象化として組織的・体系的に捉えることができる。

第二に、形容詞連用修飾の構文ネットワークは逸脱的な事例を構文の創発性として再評価するとともに，形容詞連用形を含む動詞句構文の構文間ネットワークに議論の射程を拡大できる。これによって，より包括的な記述力を備えた形容詞連用修飾研究の進展が期待される。

(2)　形容詞連用修飾の未確定性の問題

連用修飾成分「軽く」の意味・受け取られる解釈が多様かつ連続的に変わりうる。換言すれば、単独ではその意味解釈（「読み」）は未確定（undeterminate）である。「帽子を軽く叩く」の「軽く」が様態の副詞であるとは言えても、連用成分「軽く」が語彙として様態の副詞であると決めることはできない。

一方、被修飾成分である動詞句の意味クラスと修飾関係のタイプには一定の相関性が見られる。修飾関係のタイプは動詞の意味クラスだけでは予測できず、連用形形容詞（「大きく」）の概念（[大]）がいずれかの意味領域のサマ・程度を表すことは最終的な「読み」として得られるものである。本研究では、形容詞連用修飾の修飾関係の未確定性の解消をその解消されるプロセスに応じて【未確定性 A／B／C】に分類した。これによって、形容詞連用成分の未確定性の解消（＝連用修飾関係の構成関係の確定）の現象に語用論レベルの概念・作用が関わっていることが明らかになった。

- 「大きく＋V」の多様な修飾関係：①結果構文読み：「風船が大きくふくらむ。」（空間量変化動詞）②産物読み「字を大きく書く。」（産出動詞）副産物読み：「ケーキを大きく切る。」（一体性変化動詞）③着点副産物読み：「花瓶に花を大きく生ける。」（位置変化動詞）④範囲読み「山が大きく崩れる。」（状態変化動詞）⑤差分読み「髪型が大きく変わる。」（範疇未指定変化動詞）⑥開閉読み：「窓を大きく開ける。」（開閉動詞）⑦発散読み：「着信音が大きく鳴る。」（発散動詞）⑧関係読み：「心証が判決に大きく影響する。」（関係・影響動詞）⑨付帯状態読み：「小さく運んで大きく使う。」（動詞分類未詳）⑩運動読み：「船が大きく揺れる。」（運動様態動詞）
- 未確定性の 3 レベル：【未確定性A】被修飾成分レベルの未確定性「風船が大きくふくらんだ。」と「船が大きく揺れた。」が対立する動詞の語彙概念構造（LCS）のレベル。【未確定性 B】意味領域レベルの未確定性「発表のスライドのフォントを大きく変えた。」における〈フォントサイズを大きくした〉と〈フォントを全く違う種類に変えた〉が対立するレベル。【未確定性 C】意味領域の所在レベルの未確定性「リボンを短く切った。」〈切り離されたモノが[短]〉と「髪を短く切った。」〈切り離して残ったモノが[短]〉が対立するレベル。

タイプ	【未確定性A】	【未確定性 B】	【未確定性 C】
未確定性の要因	被修飾成分	意味領域の種類	意味領域の所在
意味領域	異なる	異なる	同じ
解消のレベル	被修飾成分（動詞句）	LCS・事象構造内の意味領域	文の文脈
語用論的プロセスの相対的関与	低	中	高

そして、本研究では以下のことを明らかにした。

- 形容詞連用修飾の読みは未確定的であり、その未確定性は被修飾成分の動詞句の意味構造や文コンテキストを参照するオンライン構成によって解消される。
- 形容詞連用修飾の未確定性には「被修飾成分レベルの未確定性」「意味領域レベルの未確定

性」「意味領域の所在レベルの未確定性」の3つのタイプが認められる。

- 形容詞連用修飾の関係構成は連用修飾成分としての詳述指定機能として行われる。詳述指定機能は文の成分としての形容詞連用修飾の意味的・機能的特性であり、構文として要請される。
- A/B/Cすべてのタイプの未確定性の解消には語用論的環境としての文コンテキストが関与している。各タイプは未確定性が解消するレベルと語用論的プロセスの関与の度合いに違いがある。
- 形容詞連用修飾の関係構成はオンライン構成によるが、形容詞連用修飾の構文機能的観点と文コンテキストにおける語彙語用論的観点の両面からの分析が必要である

本研究の成果によって、形容詞連用成分という文の成分レベルにも語用論的要因（文文脈におけるオンライン構成、アドホック概念構築）が関係していることが明らかになった。文の成分として扱われてきた形容詞連用修飾の分析に語用論的観点から上記の知見が得られたことは新規的な成果と言える。

(3)　感情形容詞の連用修飾関係と主体性の関与

次の例のように、話者や主語の感情を参照してサマを特定すると解釈できる連用修飾用法を「感情喚起の修飾関係」と呼ぶ。形容詞連用成分は主語（動作主）ではなくデキゴトの外在者＝話者の感情によって、デキゴト内部のサマに言及し、詳述（意味的修飾限定）している。

- 原っぱの真ん中にバス停がさびしく立っていた。
- 駅を出ると目の前に磐梯山が頼もしくそびえていた。

本研究で問題になる論点は、第一に、情態修飾で参照される感情のありかの問題である。感情のありかが話者である修飾関係の読みを「話者読み」と呼ぶ。

第二に、これが情態修飾であるという点である。次の例は話者読みではないが、情態修飾によってデキゴトの描写に貢献している。感情の主体が動作主である読みを「動作主読み」と呼ぶ。さらに、誰の感情でもなく感情形容詞の語義を参照しているだけの読みを「語義読み」と呼ぶ。3 種の特徴についても論点になる。

- 夏子は部下の報告を頼もしく聞いた。
- 春夫はソファで心地よく昼寝している。
- 喚起主のありか：描写されるデキゴトに内在するかしないか
- 情態修飾の有無：デキゴト内のサマを特定するかしないか

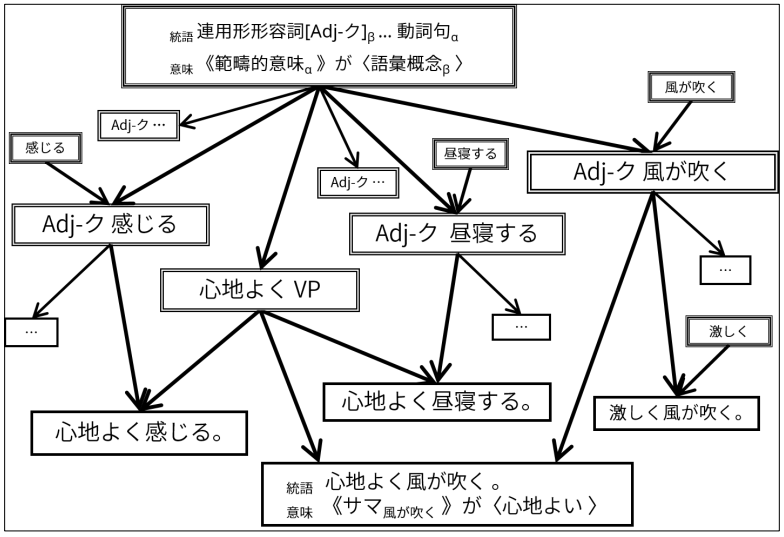
このように、感情喚起の修飾関係を分析すると、3 種の読みについて、喚起主体のありか・情態サマの特定の有無について、評価成分を含めた特徴づけが明らかになった。

<table>
<tr><th></th><th>喚起主体のありか</th><th>サマの特定</th></tr>
<tr><td>語義読み
例）古い看板が寂しく立っている。</td><td>なし（語義）</td><td rowspan="3">あり</td></tr>
<tr><td>内在読み
例）春夫が心地よく昼寝している。</td><td>デキゴトに
内在</td></tr>
<tr><td>話者読み
例）風が心地よく吹いている。</td><td rowspan="2">デキゴトに
内在しない
（非内在）</td></tr>
<tr><td>評価成分
例）夏子が珍しく欠席した。</td><td>なし（注釈）</td></tr>
</table>

第三の重要な論点は主体性である。話者読みを含む文は事態把握における「主体の没入」が顕在化した文であり、主体的な文と言える。よって、なぜここで主体的な話者読みが成立するのかは説明が必要である。

この問題について、本研究では、(1)で導入された構文ネットワークをもとに、構文スキーマから、感情形容詞の導入と整合的な具現化の原理によって、主体性の顕現が動機づけられ、話者読みが成立するという分析を行った。

- 話者読みとは連用形形容詞詳述指定構文のスキーマと機能的要請に整合した具現化を得るために、形容詞の意味解釈に主体性が顕現した読みである。



この読みは解釈コストが高

いため、語義読みという解釈コストの低い読みも生まれると説明できる。本研究で得られた知見は次のようにまとめられる。

- 感情形容詞による感情喚起の修飾関係にはデキゴトに内在しない話者を喚起主とする話者読みがある。話者読みは喚起主の感情と喚起対象の属性の双方を表す形容詞によって構成される。
- 感情喚起の修飾関係の 3 種の読みと評価成分は喚起主体のありかと詳述指定機能の観点から体系的に位置づけられる。
- 話者読みの形容詞連用修飾を含む文は主体性が顕現した主体的な文である。主体性の顕現は構文が担う詳述指定機能によって動機づけられ、話者読みは形容詞の語彙と構文の構成によって成立する。
- 形容詞連用修飾の意味的多様性と機能的一般性は、連用形形容詞詳述指定構文のスキーマとその具現化のネットワークによって捉えられる。

本研究では、感情喚起の修飾関係の事例に詳述指定構文のネットワークを適用し、話者読みの成立を支える認知的基盤・構文的機能を検討した。連用修飾を構文ネットワークから考えるアプローチは修飾関係相互の関係を明確に捉え、多様な用例に対する予見性をもった体系的記述を可能にする。

(4)　モノの存在のサマを表す形容詞連用修飾

本研究では、形容詞連用成分「大きく」が動詞のテイル形「入ってい（る／た）」を被修飾成分として連用修飾関係を構成している事例の文法的特徴と成立条件を考察した。

- アップルパイにリンゴが大きく入っている。看板に「○○」の文字が大きく入っている。

このような事例を本研究では「［大きく入っている］タイプ」と呼んだ。このタイプの形容詞連用修飾関係は、①狭義状態変化ではない、②内項の、③モノのサマである、④空間量を表すが、⑤形容詞と動詞の意味領域が整合しない修飾関係であると位置づけられる。

本研究で、［大きく入っている］タイプの特徴として、いくつかの新しい知見が得られた。第一に、述部に動詞テイル形が有意に現れることである。これは一般的な状態変化の結果修飾関係（いわゆる結果構文）にも、動作様態修飾にも見られない。第二に、述部の動詞テイル形が「知覚されない〈過程〉：知覚された状態を事態の推移過程の一つの1つの断面としてとらえる」という、動詞テイル形結果継続の派生的な用法が起こっていることである。第三に、これに派生して、空間の属性への関心、〈場所〉の特徴づけという条件から、形容詞連用成分が表す属性の知覚が視覚に偏ることである。第四に、〈場所〉ニ句に入る名詞句は典型的な空間ではなく、「アップルパイ、看板」などのモノの中や表面であり、いわば〈モノに見出された空間（空間として認識されたモノ）〉だということである。以上の分析から、次の知見を得た。

- ［大きく入っている］タイプの特徴：
  a.　弁別的特徴：①被修飾成分が狭義状態変化動詞ではない。②内項のサマを表す。③モノのサマを表す。④空間量を表す。⑤形容詞の語義と動詞の変化の意味領域が整合しない。
  b.　成立する文の特徴：動詞テイル形が知覚されない過程を言語化して〈存在〉を表し、ニ格句に空間としての典型性の低い〈場所〉が現れる。形容詞連用成分は〈対象〉のモノのサマを詳述することで〈場所〉を特徴づけ、事象の描写に寄与する。

このように、この修飾関係は動詞文の成立条件と形容詞連用成分の意味的特徴が精妙に整合した事例と言える。本研究で取り上げた事例は、有標性の高い事例といえるが、ここには「襖に大きく虎の絵を描いた」のような作成事象や「壁に写真を大きく飾った」のような展示事象など、位置変化・存在物・発生・結果といった諸事象における形容詞連用修飾関係の分析にも展開していく可能性を持っている。

(5)　終わりに

以上のように、本研究では、形容詞連用修飾の意味的多様性（一成分・多解釈の現象）と機能的共通性を修飾関係による意味的詳述指定の原理と、構文ネットワークにおける整合的な具現化プロセスとして捉えることを提案し、その分析の枠組みにもとづいて、先行研究で看過されてきた具体的な事例を記述的に分析してきた。

本研究で得られた研究成果は、その具体的な知見が新規性を持つだけでなく、一成分・多解釈の現象を構文ネットワークと詳述指定機能という共通の分析の枠組みで記述・分析できるということを実証したことに大きな意義がある。これによって、日本語の形容詞連用修飾の分析の射程は先行研究のそれ以上に拡大し、通説的な逸脱も、形容詞による連用表現の創発性として捉えることが可能になる。さらには、いわゆる結果構文論の視点や文成分の分類論に偏りがちであった日本語情態修飾関係を再照射し、新しい記述研究の枠組みを展望できるようになるものと期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 井本亮	４．巻 18
２．論文標題 形容詞連用修飾関係の構文ネットワーク分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本認知言語学会論文集	６．最初と最後の頁 466-472
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井本亮	４．巻 14-3
２．論文標題 [書評]村上佳恵著『感情形容詞の用法―現代日本語における使用実態―』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本語の研究	６．最初と最後の頁 126-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.14.3_126	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 井本 亮
２．発表標題 「パイりんご文」の位置づけについて
３．学会等名 現代日本語文法研究会第 19 回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 井本 亮
２．発表標題 「アップルパイにリンゴが 大きく入っている」文 の成立環境について
３．学会等名 現代日本語文法研究会第 18 回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 井本 亮
２．発表標題 状態描写の形容詞連用修飾について
３．学会等名 現代日本語文法研究会第 17回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 井本　亮
２．発表標題 「パイりんご文」の位置づけについて
３．学会等名 現代日本語文法研究会第19回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 井本 亮
２．発表標題 「アップルパイにリンゴが大きく入っている」：モノの存在のサマを表す形容詞連用修飾
３．学会等名 日本語文法学会第22回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 井本 亮
２．発表標題 感情感覚形容詞の構文間ネットワーク：話者認識タイプを中心に
３．学会等名 日本言語学会第158回
４．発表年 2019年

１．発表者名 井本 亮
２．発表標題 程度修飾と情態修飾の接点について：ヨウニ節を手がかりに
３．学会等名 現代日本語文法研究会第 16 回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 井本亮
２．発表標題 形容詞連用修飾に現れる主観性をめぐって
３．学会等名 第15回現代日本語文法研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 天野みどり、早瀬尚子	４．発行年 2021年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 296
３．書名 構文と主観性	

１．著者名 加藤　重広、滝浦　真人	４．発行年 2020年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 308
３．書名 日本語語用論フォーラム　3	

１．著者名 森山卓郎・渋谷勝己	４．発行年 2020年
２．出版社 三省堂	５．総ページ数 208
３．書名 明解日本語学辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

KAKEN：18K00604
https://imotoryo.com/
福島大学教員・研究者情報検索
https://search.adb.fukushima-u.ac.jp/fkshp/KgApp/k03/resid/S001875
research map
https://researchmap.jp/iMotoRyo/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関